

よい実践が生まれること、手垢のついたカリキュラムでもデザインして価値を生み出せば個性化教育のシンボルたり得ることを力説された。

その上で、佐久間先生にとっての新たな個性化教育の3つのポイントを提示された。それは以下の3点である。

シンボル・実践校・指導者

良きシンボルは、現在の佐久間先生にとっては、自校の実践であるところの複数教科同時進行個別学習とカリキュラムデザイン、良き実践校は東浦町立石浜西小学校、良き指導者は上智学院の佐野亮子先生。

佐久間先生からの新たなポイントが生まれた瞬間であり、参加者にとってもそれぞれが自分にとってのシンボル・実践校・指導者はなんなのかを、考えるきっかけになったと言えよう。

(文責 中田・埼玉)

2科目同時進行单元内自由進度学習-中学保健体育科での試み-

東浦町立東浦中学校 竹内 学

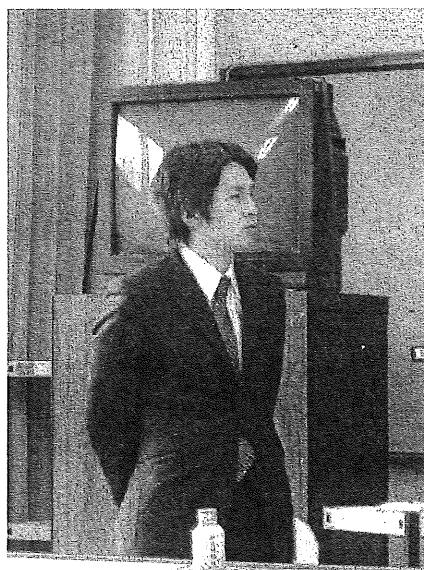
竹内先生は、初任者としての5年間を石浜西小学校で過ごした。当時、小山儀秋校長先生が赴任し、竹内淑子先生を中心に展開された個性化教育の実践が、その後の竹内先生の教師生活を決定づけたのではないだろうか。

石浜西小を離れ、東浦中学校に転任したことは別の意味で驚きだったそうだ。そこでは学力の二極化が見られ、学習意欲の無い生徒は荒れ、それに対応すべく「高校へ行きたいなら授業に出なさい」という言葉が飛び交うのを残念に感じたという。

魅力ある授業を目指して、石浜西小時代に取り組んだ「〇〇学習」を開始。生徒一人当たりの学習時間と場所を確保するために、2科目同時進行单元内自由進度学習に取り組んだ。通常、体育など用具を使う学習は、クラス全体で行った場合に一人当たりの用具を使う時間や場所が限られたものになるが、クラスを半分に分け、同時進行で別の学習を行えば一人当たりの学習時間と場所は単純に2倍になり、取り組める学習活動も2倍になる。竹内先生は、体育のマット運動と抱き合わせで、感染症に関する保健学習に取り組まれた。保健学習用にと体育館に置かれた長テーブルが、とても大胆に写って見えた。

教師の胸ぐらをつかみかねない生徒が、保健の新聞作りを熱心に取り組んでいたり、ハードディスクレコーダーの追いかけ再生機能(演技の直後に生徒が自分の姿をモニターで見ることができる)を使って何度も自分のマット運動の技を確認したり、技のコツを自分なりに追究する姿も見られるようになってきたという。途中からは、授業のチャイムが鳴る前に準備をして生徒が始めるようにもなったそうである。適切な時間と場を用意すれば、どんな子どもも学習に自ら取り組むのだということを実感した実践だった。

(文責 中田・埼玉)



〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
庶務部長 佐久間 茂和
〒114-0003 東京都北区豊島 8-27
フレーシエル王子神谷 2-914
tel03-3912-2797
e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp
日本個性化教育学会ホームページ
<http://zenkoren.com/>

日本個性化教育学会 第10号
平成22年 5月8日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 中田 泰志

日本個性化教育学会

発行

平成22年 5月8日

発行責任者

加藤 幸次

日本個性化教育学会報

第10号

昨年の我が国の政治面での激変は政権交代。その政権交代は、教育にも大きな影響を及ぼしていると言ってよいでしょう。そこでのキーワードは「政治主導」。これまで取り組まれてきたことが、数多く変革の波にさらされています。今回の春季研修会では、「政治主導」の動きに対して、学校と教師にとって本来的に重要な自律性と創造性を確保するためには何が必要か、理論的、実践的に考える場として開かれました。

日本個性化教育学会春季研究会

『政治主導』の時代における学校と教師の自律性・創造性

- 1 期日 2010年3月28日(日)
- 2 場所 上智大学8号館 8-208教室
- 3 日程 10:00~10:10 開会行事
10:10~11:00 講演「教員免許制度の今後と学校教育の質」
上智大学名誉教授 加藤 幸次
11:10~12:00 講演「広がるテスト体制とカリキュラム・ポリシー」
上智大学准教授 澤田 稔
12:00~12:30 全体討論1
13:30~14:10 実践報告1「個性化教育を『始動』する学校経営の工夫」
台東区立東泉小学校 佐久間 茂和
14:10~14:50 実践報告2「2科目同時進行单元内自由進度学習
~中学保健体育科での試み」
東浦町立東浦中学校 竹内 学
15:00~16:00 全体討論2

講演「教員免許制度の今後と学校教育の質」

上智大学名誉教授 加藤 幸次

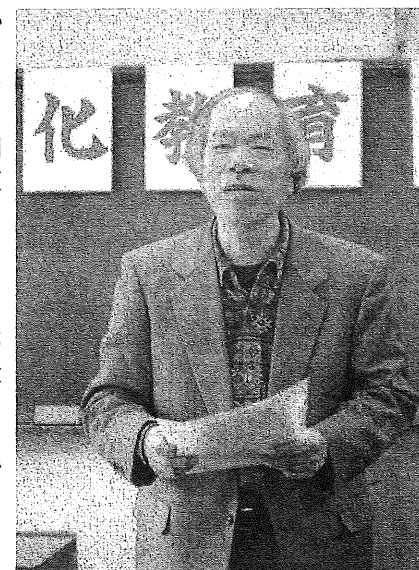
加藤先生は開口一番、教員免許更新制度の昨今の迷走ぶりから教員免許制度のこれからを考えるようになったと話された。加えて、アメリカの教師はほとんどが修士号を持っている。そこもきっかけになったとのことである。

まず話されたのが、九州大学の八尾坂氏が提唱された上進制である。更新制と異なり、上進制では免許の更新が給料等に反映される。では、上進制とはどのようなものなのか、そこから話を始められた。

はじめに、アメリカのマディソンでの教員の給与表を例示された。アメリカでは、教育委員会ごとに教員の給料を決めることができる。学士から修士、博士号をとるごとに細かく給与が上がっていく。これを例にしながら、日本の免許更新制度も大学で単位を取って、それを積み上げて修士や博士の学位を取り、生涯賃金も上がるようにすればよいのではないかと提案された。

次に、上進制度の詳細について提案された。それが、以下である。

- 1 現行の教員免許更新制の成果を取り込む。
- 2 新設される教員免許上進制は、次の教育機関により実施。
①既存の教職大学院大学、教育学部の大学院を拡大、充実。
②上進制に特化する大学院大学を新しく開設する。通信教育システムも充実させる。



- ③都道府県教育センター等が行っている5年、10年、15年経験者及び管理者研修等を根本的に改変し、可能な限り上進制に必要な「単位」を授与する機関とする。
 - ④現行の教員免許更新制の「講習」を行っている教育機関のうちで、継続して上進制に参加する教育機関の提供する、大学院レベル担当者の行うコースに「単位」を与える。
 - ⑤一般の大学、大学院での「科目等履修生」を充実する。
- 3 既存の「学位授与機構」を上進制の認定・学位授与機関とする。
 - 4 「教員免許上進制」を促進する、新しい給与体系を作る。
 - 5 「教員免許上進制」を資金的に支援するシステムを作る。

2の③に関連して、加藤先生は、都道府県で行っている教育センター等の研修には膨大な経費がかけており、これを大学の単位に認定してはどうか、と提案された。また、学習指導要領を昭和22年の「試案」時代に戻してはどうか。今の民主党政権が地方分権というならば、こういうことにもぶつかるのではないかと、とも話された。

免許の更新のみならず、上進にまで視野を広げたのは、非常に画期的だし、それぞれの教師が意欲的に参加できるのではないかと思った。願わくば、この上進制が取り入れられるとよいと感じた。

(文責 中田・埼玉)

講演「広がるテスト体制とカリキュラム・ポリティクス」

上智大学准教授 澤田 稔

澤田先生からは、以下の流れで講演をいただいた。

- 1 「イントロ」社会という要因、あるいは教育のポリティクス（政治学・政治性）
- 2 社会的・文化的再生産論、格差の再生産という問題
- 3 米国におけるNCLB法の諸相：テスト中心主義教育・少人数教育・社会的弱者への支援策
- 4 NCLB法がもたらした諸問題が日本の教育に示唆するもの
- 5 再び教育のポリティクスについて

街づくりで、ボンエルフというのがある。車がスピードを出さないように、路上に蛇行や突起を出したものをいうのだが、これは西欧における市民運動の産物だった。こうした政治的意識が、実は子ども達を守ることにつながるのではないかと、問題提起をされた。

ここで、澤田先生が自身の論を展開する上で鍵となる概念を提示された。それが「ポリティクス」である。ポリティクスとは、政治性や文化の階層性という意味である。澤田先生は、ポリティクスを、本質主義と経験主義を両端とする数直線のように表して、自分はどの辺りにいるのか、と考えることもできると話された。

1970年代のオープン教育から始まり、アメリカでは常に振り子が揺れるように教育が変化してきた。その背景を元に、現代アメリカの教育を考えてみると、NCLB (No Child Left Behind) 法という法律があって、これがいろいろな問題を引き起こしている。NCLB法とは、人種や社会階層にかかわらず、学力の底上げを図るというもので、テストによって、達成基準をみたせなかった場合には、カリキュラムを作り直したり、学校が廃校になるという。この政策が、多くのマイノリティや低所得者層に悪影響を及ぼしたということである。アメリカの場合、説明責任（アカウンタビリティ）という考え方が推し進められた結果、数値化して証明することに力点が置かれてきた。その結果として、なかなか学習効果が表れなかった子にテスト当日の欠席を強いたりするまでになってきたという。

ここで澤田先生は、子どもや教師という事象の単純化の不可能性と不可避性をどう乗り越えていくかが大切だと強調された。つまり、評価を数値化して単純化することが不可能であることと、一方でそれがないと社会的に理解を得られにくいというディレンマである。

このことを乗り越えていくために、子どもの学びの姿を描いた物語的記述の共有が有効ではないかと提案された。社会的再生産（子どもの学力は、どういった家庭で生まれ、育つかで決定してしまう可能性が蓋然的に高いという事実）を認めた上で、どのようなポリティクスを構築していくかが重要になる



と力説された。つまり、個人の発達可能性の全ては運命的に決定されるのではなく、適切な環境に置けば、子どもは自ら進んで学習していく、そういった自由の余地のようなものが個性化教育学会のスタンスだとも、強調された。

個別化・個性化教育の思想的基盤であるリベラリズム（自由）の概念を豊かにし、また発信していく必要があると再び強調されて、講演を終えられた。

(文責 中田・埼玉)

個性化教育を「始動」する学校経営の工夫

台東区立東泉小学校長 佐久間 茂和

佐久間先生から配布された資料には「やっと見つけた個性化教育の実感」というタイトルが書かれていた。個性化教育学会が長年にわたり取り組み、訴えてきたことは、今日ではほとんどが国の基本施策として取り組まれている。そのことに安心して、近頃「実感」というものをあまり感じなくなってきた自分にとっては、大変刺激的なタイトルのレジュメであった。

佐久間先生からは、これまでの教員生活における自分史をひといて個性を生かす学校づくりの話を始められた。

まず冒頭でも自分が感じたように、佐久間先生もTTや個別学習、総合学習やマスタリーラーニングなど、これまで取り組んできたことが、どれも国の施策や方針に取り入れられて、方法的に新しいことではなくなった。例えば、少人数加配の先生をTTで使っていることはまかりならんと言う、笑えない話も出てきたという。また、学力低下批判の嵐が吹き荒れたことも、時代が変化してきたことに挙げられるという。

佐久間先生は、これまで下記の学校で「個性を生かす学校づくり」に取り組んでこられた。

杉並区→形成的評価の出会いとスペースの活用

宮前小→オープンスクール校舎の建設に立ち合う

緒川小学校との出会い

加藤先生との出会い

宮前小のオープンカリキュラム（はげみ学習・マスタリーラーニング・総合学習・学習環境づくり・パソコン活用・課題別学習・単元内個別学習・4教科同時進行個別学習）

精華小→はげみの廃止 2教科同時進行個別学習を徹底的に否定される

↓

環境づくり オープンスペースの活用 少人数指導やTT

大正小→教頭に昇任 奈須先生の指導で都市型総合学習に着手

台東小→教頭で転勤 都会型総合 全校総合 パソコン活用 市販ドリルを活用したはげみ

上野小→教頭で転勤 学習環境づくり 個人総合 TT パソコンの活用

東泉小→校長に昇任 ICTの推進と研究方法の改善を軸に進めた

↓

ICT以外はうまくいったという実感がわかなかった。

佐久間先生には、これまでの教員生活を通じて、トラウマがあったそうである。例えば、多様な実践も反対派の校長が赴任するとダメになったり、反対派の教員と戦い無理矢理実践を進めたとしても、真の共感や意識改革は得られないこと、研究から日常の実践に広げるというアプローチの限界、総合や学習環境、ICT、はげみからなどのアプローチではダメだという感触を挙げられた。

それでは、一体どのようなアプローチからなら「個性を生かす学校」という実感をもてるのかというところに論を進められた。佐久間先生自身の整理の中では、

①個別学習（単元内自由進度） ②個別学習（週プロ） ③オープンタイム ④緒川の6態様の4つを上げられていた。

思うようにいかに悶々としていたところに、学校に降ってわいたように職員から「マイプラン学習（週プロ・複数教科同時進行個別学習）」が立ち上がったそうである。旧交を温めたばかりの九州個性化教育学会事務局の池田先生も同じ時期に週プロを立ち上げ、実感を高めたと強調された。

佐久間先生というと「ロマン・スタッフ・カリキュラム」の3つの個性化教育のポイントが有名である。それは、今でも変わってはならず、一人一人を大切にすることの重要性やスタッフがいることで、

